

Jameson, Fredric. *The Political Unconscious: Narrative as a Socially Symbolic Act*. New York: Cornell UP, 1981.

Miller, Hope Ridings. *Embassy Row: The Life and Times of Diplomatic Washington*. New York: Holt, Rinehart and Winston.

大井浩二. 『金めつき時代・再訪：アメリカ小説と歴史的コンテクスト』。東京：開文社出版、1988。

(人文学部英文学科専任講師)

- (6) Irving Howe, *Politics and the Novel*, (New York: Horizon Press, 1957) 18-9.
- (7) イアン・ワット、『小説の勃興』、藤田永祐訳、東京：研究社、1975。
- (8) Marvin Felheim, "The Introduction, " *The Gilded Age: A Tale of Today*, (New York: Meridian Book, rev. 1994).
- (9) Kathryn Allmang Jacob, *Capital Elites: High Society in Washington, D.C. after the Civil War*, (Washington: Smithsonian Institute Press).
- (10) ロビイングに関して、プロットナーは、ロビイエージェントという言葉がでてくるのは、1829年であり、その後南北戦争の前後からロビイングも複雑になり、ワシントンに集まる報道関係者も増してくるとしている。ジェイコブによれば、当時ロビイストのサム・ワードは、"キングオブ ロビー" といわれその力を誇っていた(Blotner 93-95、Jacob 143)。
- (11) 政治小説でみると、チャールズ・ブロックデン・ブラウンの『アルクイン』(1798)のミセス・カーター、ヘンリー・アダムズの『デモクラシー』(1880)のマデラインがあげられよう。また、政治小説とは、厳密にいけないが、イーディス・ウォートンの『一国の慣習』のアンディーンが挙げられよう。
- (12) Cathy Davidsonは、小説発生期の女性の手による小説の政治的意義について、いままで影の存在とされていた女性の立場を顕在化させたものだとする。Cathy Davidson, *Revolution and Word: The Rise of the Novel in America*, (New York: Oxford UP, 1986).
- (13) 『金めつき時代』のページ数は、*The Gilded Age: A Tale of Today*, New York: Meridian Book, rev. 1994による。
- (14) *Mark Twain's Own Autobiography* (Wisconsin: U of Wisconsin Press, 1990) 111.
- (15) *Mark Twain's Own Autobiography*, 8-9.
- (16) Eric J. Sundquist, "リアリズムとリージョナリズム," 『コロンビア米文学史』、651-80。

参考文献

- Cable, Mary. *The Avenue of Presidents*. Boston: Houghton Mifflin Company, 1969.
- . *Top Drawer: American High Society from the Gilded Age to the Roaring Twenties*. New York: Atheneum, 1984.
- 後藤和彦。『迷走の果てのトム・ソーヤー：小説家マーク・トウェインの軌跡』。東京：松柏社、2000。
- Green, Constance Mclaughlin. *Washington: Capitol City 1879-1950*. Princeton: Princeton UP, 1963.
- James, Henry. *The American Scene*. Ed. John Sears, New York: Penguin Books, 1994

夢見て狂乱していた時代を背景に、その夢に縛られる人々を小説世界に描くことで、自由を失った人々の姿が前景化される。トウェインらが描いているのは、富に振り回されて自由を失っている人々の姿であり、その有り様を滑稽に描いている。

ワシントンという都市の歴史性と登場人物の人生を政治によってこの小説はむすび付けている。ワシントンの政治を動かそうと奔走した人々は、現実と幻想の乖離を知り、個人の人生を生きようとここを離れていくのである。そのジャーナリスティックな描かれ方からは、現実への幻滅よりも、幻想の大きさのほうが印象づけられる。それは、こうした乖離を描き出す視点の中に自由というテーマが内包されているからである。ワシントンを中心に行われる政治の混乱とそれに振り回される人々を描いた『金めつき時代』は、時代を生きる個人の人生の自由の問題を提示している。それは翻ってアメリカンリアリズムの問題でもある。

註

- (1) ウォーナー・バーソフは、南北戦争後の時代を大衆の感情が成熟する一方で権力の集中とそれを利用する人々が階層を作っていく時代であり、市民的不安をもたらす時代であったとしている。ウォーナー・バーソフ、“文化と意識、”『コロンビア米文学史』(1988)、(コロンビア米文学史翻訳刊行会、京都：山口書店、1997)629-48。この時期の“政治の腐敗を知ること”を題材にした小説として、ヘンリー・アダムズの政治小説*Democracy: An American Novel* (1880)をあげられよう。ここでは、主人公のマデラインの政治に対する幻滅が描かれる。この後も、ヘンリー・ジェイムズが政治を直接題材にはしていないが、真実を知ることの苦悩を『使者たち』(1903)のストレーザーに託した。これは、ロバート・ペン・ウォーレンの『すべて王の家臣』(1946)のジャック・バーデンの政治家の腐敗をしる苦悩へと連なる。
- (2) 『金めつき時代』の成り立ちに関しては、ペンギン版(1969年) *The Gilded Age* のMarvin Felheimの序文、ならびにJames M. Coxの*Mark Twain: The Fate of Humor*による。James M. Cox, *Mark Twain: The Fate of Humor*, (Princeton: Princeton UP, 1966)。
- (3) Justin Kaplanは、金めつき時代は腐敗の時代だが、人々の活動力は弱まらず産業的に成熟した国家へと変遷した時代であったと述べている。政治的な腐敗の中、一攫千金的な金持ちがあらわれてくるが、一般大衆の経済活動はまた別のレベルで活発であったと解してよいであろう。Justin Kaplan, *Mr. Clemens and Mark Twain*, (New York: Touchstone Book, 1966) 57。
- (4) Joseph Blotner, *The Modern American Political Novel 1900-1960*, (Austin : U of Texas Press, 1966)。
- (5) Robert A. Ferguson, “What is Enlightenment? Some American Answers.” *The Cambridge History of American Literature*, Vol. 1, (New York: Cambridge UP, 1994) 368-89。

との乖離を処理しつつ人々は生活していくわけである。ワシントン体験によって覚醒したホーキンズは、投機の夢であったテネシーの土地を放棄する。一方、ワシントン体験を素通りし、鉱脈を西部で探し続けついに発見するフィリップという人物も描かれる。法案が失敗に終わったあとセラーズは、法律家へと転身する夢を描く。鉱脈をおいかけるフィリップが、次のように漏らす。“私は夢想家だろうか。そうにちがいない。いや、近頃はみんなそうなのだ。誰もが蝶を追いかけているのだ”(429)。蝶の内容がなんであれ、蝶のようなものを追いかけるのは人の性といってよいかもしれない。しかし、『金めっき時代』の描いた時代は、蝶が金銭と結びついていた。金銭に翻弄される人々の姿を、この小説ではリアルに描いてはいるが、登場人物がそれぞれ自分自身の描いたアイデアを追いかけて奔走する様は、その夢を金銭的なものに変えようと、彼らを縛るものであるとも解釈できる。

『金めっき時代』をリアリズム小説としてみた場合、登場人物の滑稽さと異常さが、現実のワシントンという都市の猥雑さに吸収されるところにリアリティがあるといえよう。トウエインのリアリズムに関しては、東部的ないわゆるお上品な伝統と、西部のほら話的あるいは南部的土着性の間の葛藤として捉えられてきた。そういった意味では、この『金めっき時代』は、南部の人が東部を、あるいは、東部の人が西部を経験するという格好の場所を与えているという点で、ジオポリティカルなアメリカンリアリズムの特質をみることが出来る。

アメリカ文学におけるリアリズムの誕生は、地方の土地の生活を描くリージョナリズムの隆盛とも軌を一にする。また一方で、マックレイキング的に社会の悪を暴きたてる小説も登場してくる。こうした中で、ハウエルズによってヨーロッパ文学の流れもととりこまれ、アメリカンリアリズムが成立していく。『金めっき時代』には、この様々な要素がすでに内包されていたといえる。時代を捉えようとして書かれたこの小説は、故郷を離れて首都で生活する人々を描くことにより、地域の特徴を描き出すことともなった。また政治の有り様を描くことはそのままマックレイキング的な腐敗の暴露に通じるものがあつた。そんな中であらわれてくるのが、モラルの複雑性であるともいわれる⁽¹⁶⁾。

金銭に結びつく夢に追われる人々は、それを得ることに向けて格闘している。しかし、そういった夢を実現した社会であるはずのワシントンの姿は、猥雑なものとして描かれている。ワシントンという政治都市を、政治の力の場の日常として描きだすリアリズムは、少し浮き上がった人物達を、ワシントンという都市の実状が包んでしまうという時代の異常さを示すものとなったといえよう。そういった意味で『金めっき時代』にあらわされるワシントンという場所は、現実の場と虚構の人々をつなぐ境界として機能していた。多くの人が富を

として描かれる。トウェイン自身のジャーナリストの経験からであろうか、セラーズは情報をうまく流す人物としてメディアにとって好ましい人物となる。セラーズは、新しい法案の世論作りを新聞を利用して行うのである。発明・発見に熱中するだけでなく、メディアという不特定多数を相手にするものを利用し、壮大な計画を立案するという政治に必要な才能をセラーズは備えている。セラーズにとって、創作することが富なのであり、その関係の虚構性を好んでいたのである。虚構を信じるというのが、セラーズの才能であるとも思われる。

ここでアメリカ文化の成り立ちを考えると、このセラーズの想像力がとりわけアメリカ消費社会を生み出したものといえよう。第27章で、セラーズは、鉄道の計画を、台所にあるコーヒーカップや砂糖の瓶、はてはネズミ取りまで使い、見事に地図として見立て説明する。テーブルの上にセラーズの考える鉄道がどんどん出来あがってくる。大陸横断鉄道というアメリカ的な夢が、机の上にどんどん展開されていくのである。無に近いと思われるところからアメリカ文化は、様々なものを創造してきたのである。

セラーズの想像力は、アメリカのその後の文化を示唆するようなものを創り出すが、その中には、実現できずに終わった空想の産物も当然入っていた。金鉱探しの賭けと同じようにセラーズにとって想像も賭けなのである。法案成立が失敗に終わった後、セラーズは今度は法律家を目指すのだという。セラーズにとって現実と幻想との乖離は問題でない。なぜなら、セラーズは自分自身のアイデンティティをいつも可能性の中で捉えているからである。政治のモラルの欠如をものともせず、自分の夢をおいかけるセラーズにトウェイン自身の想像力による世界への憧れがこめられている。

モラルからも自由であるセラーズは、彼自身満足のいく自己を実現することなく、いつまでも夢を追いかけていくであろうことが察せられるが、しかし、彼の存在は、周囲にとって可能性への希望を与えてくれるものとなる。それは、マーク・トウェインという作家が、彼自身が抱えた苦悩にもかかわらず、アメリカの夢を与えてくれる作家として国民に受け入れられていったことと重なってくる。

6. 境界都市

セラーズの夢想あるいは創作と現実との乖離は、ワシントンという都市のもつ猥雑性を描き出すリアリズムの問題として捉えられる。ワシントンという都市が首都という政治機能のみを帯びた特殊な都市であると同時に、その住人は移り変わるとはいえ、社会を築くわけである。ホワイトハウス、国会議事堂、数々の歴史的モニュメントを前にここにやってくる人は、それぞれ幻想を抱く。しかし、生きるということから当然派生する問題とこの幻想

ずである。しかし、投機と鉱脈発見による富の実現により、土地は可能性としての価値をもつようになった。この土地をめぐり、すでにホーキンスの父は、この可能性に値段をつけそこない、交換に失敗している。交換による富の可能性が、腐敗した政治に左右されていることを知り、ホーキンスは、土地を手放す。額に汗して働く勤労の尊さを最後に述べるホーキンスだが、土地を残した父への恨みにも響く。土地神話とともに、父に対する神話も消しているのである。彼は、こうして次のようにつぶやく。“私は、自分のこどもにはテネシーの土地は残さない”(426)と。トウエインの自伝によれば、この可能性としての富は、彼自身の家族の人生に不安定な希望という重荷としてのしかかっていたとしている。この小説が書かれた時、クレメンズ家はまだこの土地を所有していたのである⁽¹⁴⁾。

5. 夢想家セラーズとワシントン幻想

『金めっき時代』におけるトウエインの収穫は、セラーズという人物造型にあるといわれる。トウエインの自伝によれば、セラーズは誇張された架空の人物でなく、現実とも夢ともつかぬことを情熱的に語る彼の母方の縁者James Lamptonをモデルにしている⁽¹⁵⁾。またハックルベリー・フィンとセラーズは、対照的でありながらトウエイン自身をあらわしているともいわれる。正直さと格闘するハックルベリー・フィンに対して、セラーズは夢想と格闘する。セラーズとは、てらいを含みつつトウエイン自身の理想の姿であるかもしれない。新たなものを見つけ出すことが富と結びついていた時代において、新しいものを創り出すという“創作”そのものと富が結びつくものを体現していったのが“マーク・トウエイン”であるかもしれない(James M. Cox 185)。

この創作と富をむすびつけるものが政治であるというのが、『金めっき時代』の一つのテーマでもある。『金めっき時代』のなかで最もワシントンにふさわしい人物は、セラーズであろう。第40章においてセラーズがいかにこの地で縦横無人に活躍したか次のように描かれる。

もはや先刻ご承知であるかもしれないが、ベライア・セラーズ大佐はこのときまでにワシントンで最も知られた人のひとりになっていた。彼の人生ではじめて彼の才能が発揮できる場を与えられたのである。彼は今や、巨大な計画、あらゆる種類の投機、政治、社会のゴシップの中心にいた(274)。

セラーズは、この他にも新聞という新たに力をもつマス・メディアをうまく使いこなす人

は、天使が変装してやってきたというわけではないそうだ。それでも、平均としたらいいほうだ。かなりいい。平均してそれくらいなら、我々も満足していいのではないか。人々が不平をもらし、新聞も堪忍袋の尾が切れたように怒っている時にだ、議会に尊敬すべき正直な少数派がいるってことはだ。”(356)⁽¹³⁾

多くの腐敗や、はては姦通事件まで新聞というマスメディアによって人々の知ることになる時代に、誠実な人も中にはいるという事実で満足するセラーズは、現状肯定的で楽観的判断をしている。これに続けてセラーズは、議会では必ず汚職が追求されるが、しかし罪に問われることはないという。セラーズは、アメリカという国の政治について次のように語る。

“……我々はいつも外国の注目を浴びているのだ。世界に我々のように腐敗を追求する国はないのだ。世界の他のどの国も我々のように議員がお互いを審問し、追求するようなことはしないのだ。私は、全文明社会の手本となることは、まったく偉大なことなのだと思う。”(357)

これに対し、ホーキンズが“手本”(model)ではなくて“実例”(example)だろうと尋ねると、どちらでも同じことだとセラーズは答えるのである。若いホーキンズには、議会のやり方が本末転倒に思われるのである。形式的に汚職を審議すれば事足りるとする議会に対して、ホーキンズは若者らしく疑問を抱く。セラーズが、そんな政治のありかたをこれがアメリカのやり方であると理解しているところは、セラーズ自身の現実認識が希薄であると考えられようし、政治のモラルに対して現実的な基準をもっていないとも思われる。政治とはモラルではなく形式を大切にするとトウェインが皮肉っているようである。

ホーキンズ自身は、この政治にどう関わったかという、故郷のテネシー州発展のための法案成立に力をそそぐことになる。彼にとってこの法案の成立は、そこにいわくつきの広大な地所をもつホーキンズ家が、巨万の富を得られることになるという意味がある。このテネシー州の投機を目的にした土地というのは、トウェインの生家Clemens家のもつ土地をモデルにしている。実際に、クレメンズ家の土地が富に変わらなかったように、ホーキンズ家の土地も法案の否決とともに価値を失ってしまう。政治に躍らされたことへの決着として、投機の夢を担っていた土地をホーキンズは手放す。

ホーキンズが手放したのは、土地が投機によってお金になるというこの時代の神話であったともいえる。南部の出のホーキンズ家にとって、土地とはそのものが富を意味していたは

4. 土地神話の政治性

この乖離の滑稽さを経験するワシントン・ホーキンズ(以下ホーキンズ)の話は、田舎の青年が上院議員の秘書として首都にやってきて目覚めるという成長物語とも解釈できる。彼は父から受け継いだ広大なテネシーの地所を政治の力を行使し巨万の富に変えることを画するが、その望みも消え土地を手放す決意をする。その過程をたどれば、今まで自分を不自由にしていた状態に気づきこれを脱却するという自由のテーマが浮かんでくる。田舎育ちのホーキンズにとって、首都は様々な人々がひしめきあう多様な都市として映る。上院議員ディルワージーの秘書として与えられた生活－自由に使えるお湯、豪華なカーペットと美しい絵、凝った料理など－に驚きを見せる。ワシントンにおけるヴェブレン(Thorstein Veblen)のいう誇示的消費の生活の様を垣間みることになる。しかし、やがてこんな生活にも慣れてしまうと、ワシントン自体の魅力もホーキンズにとって色褪せてくる。ホーキンズは、このワシントンでの体験を通して、父から受け継いだ一攫千金の夢の土地を手放すことを決意する。『金めっき時代』のなかで唯一人真実を知ること、つまり自由を奪われていたことに気づく人物である。

小説中、物事をありのままにみるホーキンズの眼を通じて、作者の知らせたい世の中の姿が語られることが多い。たとえば、セラーズ大佐(以下セラーズ)の話術の壮大さと実生活の乖離などである。はじめてホーキンズがセラーズの家を訪れた時、ホーキンズは壮大な投機の計画を聞き胸が熱くなるが、暖炉の部屋にいるのに薄ら寒さを禁じ得ない。よく暖炉をみると、そこにはろうそくが燃え上がる薪の代わりにあっていたのである。安価なろうそくに込められたアイロニーは、セラーズという人物像に読者の同情をひきつける。また、セラーズの家にご馳走になりに行くと、食卓には燕と水しかない。思わずセラーズの妻の顔を見てしまい、彼女を赤面させるところなど、ホーキンズのもつ率直さが、真実の姿を映し出す装置として働いている。こんな時セラーズは、悪びれもせず雄弁をふるう。セラーズという人物の偉大さは、自分の真実の姿を弁解せず、理想をのべ続けることにある。

ホーキンズとセラーズの現実認識に関し次の会話に注目したい。首都ワシントンの政治に関して、セラーズが次のように言う。

“いいかね、我々の国のような自由な国では、誰もが議員をめざすことが出来るし、誰でも投票できるのだ。だから、いつも不滅の清廉さを期待できるわけではない。そんなことは当然じゅあないかな。若い記者のヒックスが言っていたが、60人、80人、いや150人

断でモラルを問題にすることなく、運命のなすがままになるという悲劇性を強調するものとなっている。共感が抱けても道徳的理想像からかけ離れた女性が、如何に悲惨な運命を辿るかが、こういった小説ではポイントになるわけであり、『金めつき時代』もその点はずしていない。ローラの人物像は、ロビイストとして独立した人生を歩もうとする現代性と、運命に翻弄され人生を踏み外すという感傷小説の典型、また犯罪をおかすピカレスク的人物という特質を兼ね備えたものとなる。それゆえ、彼女の盛衰は、ワシントンという政治都市のもつ猥雑さを捉えているといえる。ローラが政治の倫理をないがしろにしロビイングに没入することと、女性に課されたモラルを踏み外しセルビーに付きまといていく様が同じテンポで語られていく。

ローラが女性に担わされるモラルを捨てて人生を台無しにしたように、政治のモラルがないがしろにされた結果、ワシントンという都市は猥雑さを秘めた都市となる。少し一般化にはなるが、我々は政治的な力を比喩的に肉体的力の行使として表現する。政治的に屈服することの比喩として、鎖につながれた肉体あるいは陵辱される肉体でこれを表現することがある。政治とは我々の身体からの自由から出発していることに改めて思いを馳せてみてもよいであろう。従ってこの作品で女性の墮落と政治の腐敗がモラルの麻痺という点で共通であるかのように語られる時、女性がモラルを踏み外すことで墮落した人生を辿るように、政治の墮落によって人々が不自由な人生を歩まされることをブラクティカルジョークに込めて表わしているように思われる。トウェインがこの時期に、普遍的なモラルを示そうという意図がなかったのは明らかだが、モラルの欠如をアイロニカルに描き出すことの根底にあるモラリスティックな意図は、リアリズムを考える際にまたトウェインという作家を考える際に、考慮すべき点であろう。トウェインが後に*Adventures of Huckleberry Finn*で対峙することになる自由に関する個人のモラルの問題は、こうした現実への裏返しともとれる。

『金めつき時代』において描かれた人々のあり様から導かれるリアリズムは、逆説的にはあるが人間の自由を想定していて、この自由が奪われている状態を描いているものであるといえる。ローラの人生はセルビーとの不倫以来自由を奪われた人生であるともいえる。ワシントンの人々の人生は、政治のモラルが麻痺しているために、奇妙にゆがんだものとなっている。多くの登場人物達が、一攫千金的な富の創造にまつわる人生のあり方に囚われている。そのため彼らは自分が不自由な状態にいることに気付いていないのである。モラルの欠如を通俗化することで、リアリズムと自由というオキシモロンの関係が浮かび上がる。ここで、トウェインは、夢と現実の乖離を滑稽なものとして捉えるのである。

なのであろうか。理想とするものに、問題があったと指摘することはできようが、『金めつき時代』におけるワシントンの都市としてのお粗末さには、夢を追うことの代償として人々がモラルを忘れて右往左往する様がオーバーラップしてくる。

3. 感傷小説のモラルと政治性

政治都市ワシントンに理想と現実を橋渡しする独特な階層の人々がいる。そんな人々を代表するのがロビイストである。このロビイストは、南北戦争後活動がめだつようになるが、かなりの収入を得て社会的地位の高いものもいた⁽¹⁰⁾。『金めつき時代』では、ローラが女性ロビイストとして活躍するストーリーが語られる。女性に焦点をあてることで、モラルの問題が浮き出てくる。ローラは、もともと良家の子女でありながら、幼いころ不慮の事故で両親と離れ離れになるという設定である。その後ローラは美しく成長し、南部貴族のセルビー大佐と恋に落ちるが、彼には妻子があり捨てられてしまう。復讐を心に秘めた彼女は、この時以来別人のようになるという、感傷小説風のプロットが設定される。その後ワシントンに行き、美貌を武器にロビイストとして活動するのである。ローラの最期は、実際の事件をモデルにセルビーの殺害とその後の裁判の無罪という起伏を経た後に講演者になるが失敗し、心臓麻痺で急死するという哀れなものになっている。

このローラはある法案の成立を目指し様々な活動をする。ある法案とは黒人のための大学建設という当時の進歩的な風潮を反映したものであったといえよう。ローラ自体は、この法案になんらかの意義をみいだすことより、ロビイストとしての新たな自分の使命を果たすために奔走する。ローラは、ロビイングといわれる人と人との力の綱引きに没頭していく。女性の政治性は小説において、自分の魅力を、仕事相手なり、夫なり、恋人なりに対して行使することで道を開いていくロビイスト的性向として描かれる⁽¹¹⁾。ヴィクトリア朝の家庭の天使というからを破った女性像となる。そういう観点からいうと、ロビイストとして活躍するローラは自立した女性として描かれているように思われる。しかし、感傷小説のプロットに則ったローラの人生は、その人生の選択に関して、モラルが問題にされることなく、運命に流されるのである。つまり、ローラはロビイングの際もモラルを問題視することはない。また後に犯す殺人に際しても、精神に錯乱があったとする判決で無罪になる。彼女のモラルは問われることなく、運命に翻弄された女性という結末となる。

多くの感傷小説は、女性に道徳的理想像を求める教育性を孕んでいるといわれる。逆説的に女性の道徳性を強調する感傷小説は、それゆえに女性の自立を促す政治性をもつという解釈も成り立つ⁽¹²⁾。『金めつき時代』において、ローラに降りかかる運命は、女性が人生の決

スに関しては、トウェインは皮肉を浴びせながらも興味をもって描いているようである。そして、揶揄的に外国かぶれぶりを描き、成り上がりの代表であるオーレイ家は、人間としての幼稚さが浮き彫りにされる。しかし、その自己主張のあくの強さは、眼をみはるものがある。

当時のワシントンでの社交界の勢力は、トウェインの観察するように旧勢力と新興勢力が争っていたわけだが、首都という性格上外交儀礼的な慣習は多く、新興勢力は金銭的には圧倒的な優位に立ちながらも、慣習を身につける為に旧勢力の力を頼らねばならない面があった。ワシントンの社交界は、慣習という形式を獲得することが、力の獲得にもつながるという点で、新旧二つの勢力が葛藤する場でもあったのである。一方、この慣習の愚かさは、読者には夫人達の様子から明らかだが、こうした慣習によって自己主張しようとする人々の姿は、後のリアリズムの興味の対象となっていくことをここで指摘しておこう。

トウェインの視点は、この奇妙な社交界を戯画化して描くことにあるが、この視点は首都ワシントンの姿をあらわす時にも遺憾なく発揮される。首都ワシントンを語り手は、一風変わった都市としてその特徴をのべる。その描写は、後にヘンリー・ジェームズが*The American Scene* (1907) のなかで述べるワシントンの特徴と重なるところがあるものの、かなり異なる。共通であるのは、首都にある様々なモニュメントへの言及であるが、ジェームズは、外交や、男性と女性の力関係から作られる、独特な社会について興味深いものとしている。一方、『金めっき時代』の語り手は、歴史的なモニュメントだけでなく、その合間から見えるちぐはぐさに力点を置く。天候、宿泊施設の不便さに加え、国会議事堂の付近の閑散とした様子、取り残されたような記念碑などについて皮肉たっぷりに述べる。また、当時のぬかるみ道の多さを強調し、沼地から立ち上がった街といった印象を与えるような記述をしている。ここで語り手は、プロパガンダ的な建物とそれに追いつかない南部の田舎街というちぐはぐさを醸し出す紹介をすることによって、ワシントンという政治都市の光景を通して政治の虚像と実像の乖離に気付かせる視点を提供している。

Hope Millerの*Embassy Row*に拠れば、ワシントンの首都としての景観、機能は1880年代の後半に整えられる。先進諸国の外交団からは、施設や街並みの上でかなり劣った都市とされていた。そんな実状を『金めっき時代』に描かれるワシントンは反映していると思われる。ジェームズが20世紀になって訪れたワシントンとは、比べ物にならない都市としてのお粗末さがあったのであろう。そして、そのお粗末さは、ワシントンの人々にも見てとれるという筆使いが『金めっき時代』の調子でもある。ワシントンという政治都市が、その時の政治や社会の理想によって成り立っていったとすると、その実状のお粗末さの原因となるものは何

ンは1790年に新しい連邦政府の基地となるよう首都として都市設計される。新しい国家とともに作られたこの都市は、その他の都市(Boston 1630年、New York 1653年、Philadelphia 1682年)に比べ圧倒的な若さを誇る⁽⁹⁾。これらの旧くからある都市では、いわゆる社交界の成立も早いわけだが、ワシントンでそうした社交界が出来上がるのは、南北戦争以後のことである(Jacob 2-3)。従って、ワシントンの社交界は、それ以外の都市がいわゆる地元の有力者によって成り立っているのに対し、その時々権力を得た政府の関係者が中心になって社会を形成していくことになる。トウェインらが観察した時代は、グラント政権時代が中心となるが、南北戦争をはさんで最も変化の大きい時代でもあった。戦前のワシントンは南部の民主党員が中心であったのが、戦後、北部の共和党員へと様変わりしていく。『金めっき時代』でも、ローラを騙す南部貴族のセルビー大佐の戦争をはさんだ変化は、気品と健康を魅力としていた姿から、戦後は負傷した体でワシントンに綿花のプランテーション経営に関し嘆願にくる姿への変化という南部の没落を象徴するひとこまとして描かれる。

ワシントンの社会に関して、トウェインは『金めっき時代』で彼自身の体験から社交界の人々を3つのグループ(the Antique [旧勢力]、the Middle Ground [政府関係者]、the Parvenus [新興成り金])に分けて滑稽に描写している。南部で育ち西部の生活を経験したトウェインにとって、ワシントンの社会はとりわけ奇異なものと映ったと思われる。この社交界の人々を描く章では、作者注として、こんなひどい会話が実際にアメリカの居間で行われているのでなければ、わざわざ書いたりしないと断り書きを付けたりもしている。トウェイン自身の体験を辿ると、彼は、*The Innocents Abroad*を完成させるのに必要だとワシントンに現れ、ネヴァダの銀鉱王スチュワートが上院議員としてワシントンのホテルに居を構えたところへ秘書として雇い入れられる。これは、スチュワートの方でも、トウェインの西部での名声を彼の政治キャリアに活かそうと思ってのことだった。しかし、そこでのトウェインの生活は、書くことより酒に向かうことが多かったようである。スチュワートには、トウェインは“評判のよくない、いかがわしい、危険な人物”と映った。実際、トウェインは素行が悪く寄宿舎の女主人から立ち退きを命じられるほどで、この秘書の職もやめてしまうのである(Jacob 81-2)。

作品のなかでは、ワシントンの社交界はトウェインが名づけた“アンティーク”と“パーヴェナス”という新旧二大勢力の夫人達のきまりきった型通りの会話が続いていく様が描かれる章がある。この観察者は、ロビイストとしてこの社会に入っていこうとする若い女性ローラである。この二つの勢力の描かれ方を見ると、アンティークといわれる古くからワシントンに住む旧勢力が、無味乾燥な人々と映るのに対して、新興の成り金勢力のパーヴェナ

American Slave (1845)や、ハリエット・ビーチャー・ストウ(Harriet Beecher Stowe)の*Uncle Tom's Cabin* (1852)などである。『金めっき時代』は、この後の南北戦争後の社会で生まれてくるのである。南北戦争を経て、政治が社会や一般の生活に及ぼす影響の大きさを経験した人々にとって、社会と個人という対立関係は政治と自分の生活という対立関係によって認識される様になったと考えることもできよう。政治というものを理想や抽象的なものでなく、個人の社会的経験として把握しうるメンタリティが養われたことにより、政治を小説の興味の対象とし得たといえる。アーヴィング・ハウ(Irving Howe)は、政治小説の先駆けとなる社会小説の誕生について、ピカレスクノベルに見るような人々の社会生活への関心が増した結果であるという⁽⁶⁾。個人の経験が小説の描写の対象となる時、イギリスのリアリズム小説が興ったのであるとするイアン・ワットの論旨もこれを補強しよう⁽⁷⁾。アメリカにおいても、19世紀後半の文化の成熟にともない、政治や社会を描く興味が増し、これを滑稽化する感性が生まれたといえよう。“金めっき時代”とは、物質主義的なものの見方が横行する一方、これを客観視できる感性もあわせて育っていた時代とも考えられる。

トウエインが小説の題材に政治を取り上げたのは、彼のジャーナリストとしての手法と政治の実験を経験したことによる知識により、今までにないアプローチを小説のなかで取り入れられるのではないかと考えたからではないだろうか。この小説の執筆の契機になったといわれる、流行の小説よりもっとおもしろいものを書くに妻達に請けあったという逸話もそんな風に理解できる⁽⁸⁾。社会の変動を読み物として共感をえる書き方であらわすという課題は、首都ワシントンの姿という一般の読者にとって一種抽象的な素材をリアルに描くという選択に結びついたと思われる。そうすることで、周知の事実である政治家の腐敗ぶりを、道化の姿として読み物にできたのである。政治をあらわそうとした時、公的な興味より私的な興味で捉えたところに、この小説の新しさがあるといえよう。トウエインらの生きた時代において、政治に対する幻滅は大衆の共有するものであったといえる。しかし、その幻滅を通して、アメリカ文化の目指した理想も垣間みえてくるはずである。

トウエインらが首都ワシントンの姿を描く姿勢は、都市としての風俗とそこでの人々の奔走ぶりを描くというジャーナリスティックなものである。そこでワシントンという都市をどう印象付けようとしているのか、そしてそこでの人々の奔走ぶりからあきらかになるモラルと虚構の問題を以下に述べていこうと思う。

2. ワシントンD.C. という社会

キャスリン・ジェイコブ(Kathryn Allamong Jacob)の*Capital Elites*によれば、ワシント

ネルギーと、それがひきおこすモラルの問題を感じさせるものとなっていると思われる⁽³⁾。

自らが位置する時代を金めっきと揶揄的に表現する時、その表現者は自分達をどこにしているのだろうか。経済の変質とモラルの問題をにらみつつ、自分達の置かれた状況を客観的に表出することで、自分達の自由度を計っていたともいえようが、どの登場人物にも同化することなく観察者として注釈を加えるような語りは、語り手自身も弁明したいものを抱えていたからであろう。そうしたトウェインらの意識のあり方を、作品の中心になるワシントンという都市の描かれかたを中心に考察してみたい。それにより、ワシントンという政治都市のもつリアリティが、『金めっき時代』において、現実と幻想、善と悪、個人と社会という対立する概念が異種混交的に存在する一つの境界として機能したことを検証できればと思う。

1. 政治小説の可能性

『金めっき時代』という小説については、その名が19世紀後半のアメリカにおける経済的狂騒と政治の腐敗をあらわす言葉として流布したという点が強調されることが多いことをさきほど述べた。たしかにここでは、鉅脈探しや一攫千金に躍らされる人々と政治の腐敗ぶりが描かれているわけだが、ワシントンを舞台にした政治のあり方についての政治小説の要素も否定できるものではない。政治を小説のモチーフとした場合、そこに描き出されるものについて、ジョーゼフ・ブロットナー(Joseph Blotner)は、文学が政治の現実を伝えるものではないにしろ、政治的人間としての人間の真実を伝えうるものであることを示唆している。ブロットナーは、政治を通して作家が描けるものが何かと考える時、政治にかかわることで体験したアメリカ文化やアメリカ的美学というものが明らかにされることではないかとも述べる⁽⁴⁾。

本稿も作家の政治性ではなく、政治という力を人やその人生と絡ませ、どのように表象していくかに焦点をあてて『金めっき時代』を考察しようとするものである。19世紀後半に政治という力が、トウェインらにどのように意識されていたのかをみていこうと思う。政治を描くという点でアメリカ文学を少し振り返ると、はじまりは、独立革命期のころである。当時、政治の理想を説く詩や、政敵を諷刺する詩が多く書かれた。また、昨今当時の政治的パンフレットの文学的評価など活発におこなわれている。たとえば独立革命のもつ光と闇を初代大統領ワシントンの政治家としての盛衰に重ねあわせた文学的解釈があげられよう⁽⁵⁾。南北戦争のころになると、小説は作家のイデオロギーを含め政治性をもつものとなる。フレデリック・ダグラス(Frederick Douglass)の *Narrative of the Life of Frederick Douglass, an*

*The Gilded Age*におけるリアリズム： 虚構と現実の境界都市としてのWashington, D.C.

佐久間 みかよ

アメリカ文学にあらわれる政治の描かれ方は、南北戦争以降、理想と希望といった肯定的な要素が消え、疑念と諷刺の要素が濃くなっていく。政治小説といったジャンルを考えるとすると、多くの場合、理想が崩れること、あるいは腐敗を知ることに伴う苦痛がテーマとされる⁽¹⁾。しかし、題材として政治を描いたという観点で『金めっき時代』(1873)をみる時、この作品は政治の腐敗に対する批判やそれを知ることによる葛藤ではなく、現実をジャーナリスティックに滑稽化する身振りを強調している。こうした視点がアメリカ文学のコンテクストのなかで何を意味するものであるのか再考することから、アメリカンリアリズム小説の成り立ちの一要素を検討してみたい。

マーク・トウェインらの描いた『金めっき時代』は、その名が時代の風潮をあらわす言葉として流布することになったが、19世紀後半の南北戦争後の政治と世相をあらわす風俗小説である。この『金めっき時代』の序文の皮肉たっぷりの調子にもあるように、トウェインらの目的は、時代を反映する出来事を読み物としておもしろく描くことにあった。結果として、投機に翻弄される人々や政治の腐敗、モラルの喪失といった古くて新しい問題をあからさまに描きだすものとなった。『金めっき時代』は、トウェインという作家を考える上では、チャールズ・ダッドリー・ウォーナー(Charles Dudley Warner)との合作であるという点でも、また作品の一貫性という点でも、それほど評価できるものではない。トウェインが1章から11章までを一気に書き上げ、その後も人物造型やワシントンの政治の腐敗、金鉱探しなど題材の提供をし、一方、ウォーナーはプロットを請け負ったとされている⁽²⁾。

この作品の読まれ方は、19世紀後半というひとつの時代を“金めっき”と表現し表象したことを中心にしてきた。ここで“金めっき”という表現とトウェインという作家を重ねあわせると、その表現に含まれる憧れと自嘲という二つの分裂した意味合いに、トウェイン自身の抱える分裂が微妙に重なりあい、アメリカという国のもつ現実と虚構を繋ごうとする大きなエ